

会長講演

3. 11 以降の運動処方学会への提言

長尾 憲樹^{1), 2)}

1) 元気寿命を創造する会, 2) 川崎医療福祉大学 健康体育学科

東日本大震災から、早7ヶ月と4日の歳月が流れました(10月15日基準)。学会員の方々は、如何なる想いを持たれていますか。

私は「天災は、忘れたころにやってくる。」と喝破した寺田寅彦(物理学者)の言葉を噛み締めています。この間に、歴史的事実から学べば、想定という数値は、いかに虚しいものであるか。専門家、有識者、科学者とは、どのような思考を持った人々なのか。そして、マスコミを始めとする情報の何を、信じるべきなのか等々を考え続けています。

この夏に小泉八雲記念館を訪れました。記念館の陳列棚のなかに、5kgのダンベル2個が存在しているのです。10年以上前に訪れたときには、それがあった記憶はありません。さて、ラフカディオ・ハーンが書いた「A Living God」からの抜粋の和訳「稲むらの火」の話が、脚光を浴びています。実在した人物の濱口梧陵は、1854(安政元)年に紀伊半島や四国一体を襲った安政南海地震の際に、和歌山県、前村の村民1298人を、高台に避難させて救いました(死者30人)。ラフカディオ・ハーンは、1896(明治29)年6月15日に発生した明治三陸大津波の惨状を受けて執筆し、津波による人的被害を最小限にとどめた庄屋・濱口梧陵の話を物語化しました。我々は、この物語から何を学び取るべきでしょうか。

そしてそれを、現在に生かす為には運動処方学会員は、何が出来るでしょうか。東海道・東南海・南海+ α を震源地とする連動大地震と大津波、30年以内に70%の確率で発生すると予測されています。明日かもしれないのです。

日本運動処方学会の掲げる目的を熟慮して戴きたい。

この会は、健康に生活できる権利を守る為に働く現場の指導者とその教育・研究者の緊密な情報・学問的交流を行うことによって、各々の資質を向上させ、人類の健康に対するより良い貢献を目的とする。